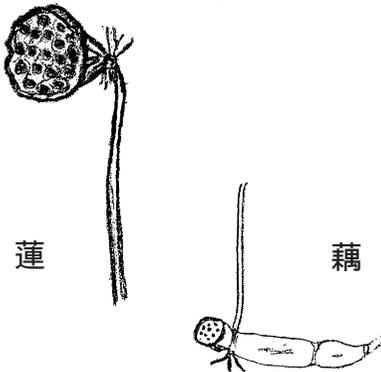


水の下にはハスネが二つ、
 仲良く並んでふくらみを増し、
 水の上にはハチスが二つ、
 左右の目のように並び立つ。

後半の二句は、眼前の実景としてではなく、これから先のハスの生長過程を想像したものと捉えるべきであろう。「並」という同じ漢字が使用されている点に、やや素朴さを感じさせるものの、比較的きれいな対句を構成している。「藕」は、ハスの根のレンコンとなる部分をいう。「蓮」は、花が枯れた後にできる、多くの実（種子）をたくわえるための果托をいう。その形状が蜂の巣に似ていることから、ハチスとも呼ばれる。

夏に色鮮やかに咲き人々の目を楽しませていた花も、やがては枯れてしまうが、その代わりに秋になれば「蓮（果托）」には多くの実（種子）がなり、根の先端はふくらんで「藕（レンコン）」となる。今度は実（種子）と根とが食用として人々の舌を楽しませることになるのである。



さて、「青陽度」という詩について、ひとまずは以上のように解釈してみたが、この詩の解釈をここで終わらせてしまったのでは、この詩の面白みは半減してしまうであろう。

実はこの詩には、後半の二句に、ある仕掛けが施されているのである。前半の二句が色彩語の多用によって視覚面に訴える効果をねらったものだとすれば、後半の二句はそこに施された仕掛けによって聴覚面での効果をねらったものだとと言えるであろう。

では、どのような仕掛けが施されているのか。種を明かすと、三句目の句末の「藕(ǒu)」の字が同音の「偶(ǒu)」の字を連想させ、同様に四句目の句末の「蓮(lián)」の字が同音の「隣(lián)」の字を連想させる、といった仕掛けが施されていたのである。いわゆる「掛け詞」に似た修辞技法で、中国ではこれを「双関語」と呼んでいる。

「偶」は、「つれあい、配偶者」の意。「隣」は、「愛しむ」の意。つまり、後半の二句には、「たとい盛り時期が過ぎたとしても、いつまでも夫婦として寄り添って愛しみあいたい」といった、おそらくは女性の恋心が託されていたのであり、この詩もやはり男女の情愛をテーマとしていたのである。

試験に絶対出ない英単語

経営学部
 安藤 聡

・chad: 「紙に穴を開けたときに残る丸い屑。」こんなものにまで名前があったという事実に感動を禁じ得ない。ちなみにこの単語は『プログレッシブ英和辞典』（小学館）にも掲載されているが、定義は「チャド、(パンチカードの)さん孔くず」となっている。「さん孔」は正しく書けば「鑽孔」であり、『新明解国語事典』（三省堂）によれば「堅い岩、鉄などに穴をあけること。[広義では、紙のテープに穴をあけることや、パンチカードにパンチを入れることをも指す。]」である。だからchadを強いて日本語で言えば「鑽孔屑」ということになるが、口頭で言ってもおそらく通じないであろう。

・ **phosphene**: 「目をこすったときに見える光の粒。」これも一応、『プログレッシブ』に載っている。発音は綴り通りで、強いてカタカナで書けば「フォスフィン」である。「光視、眼内閃」という訳語が与えられている。試験にも絶対に出されないであろうが、日常会話でもまず使わない単語だ。

・ **lunula**: 「爪の根本の白い部分。」これも『プログレッシブ』にエントリーされている。発音は綴り通り「ルーニュラー」で、「ルー」に強勢が置かれる。語義は「新月[三日月]形のもの；小づめ・半月紋様など」とあり、「爪の白い部分」とは限らないようだが、この部分は確かに三日月の形をしている。ラテン語で「月」を意味する 'luna' の派生語であることは言うまでもない。ちなみにおなじく 'luna' からの派生語である 'lunatic' は名詞で「狂人、精神異常者」、形容詞で「狂気の、常軌を逸した」の意味だが、原義は「月に影響された」である。古来から月は人間の理性を左右すると信じられてきた。狼男が満月の夜に狼に変身することも、このことと無関係ではない。ついでながら、「三日月」は英語で 'crescent'、フランス語で 'croissant' (クロワッサン) である。

・ **beefalo**: 「牛と水牛の合いの子。」これは『プログレッシブ』にはない。『リーダーズ英和辞典』(研究社)にはある。「【畜】ビーファロー《野牛と畜牛との雑種の肉牛》」だそう。ちなみに『リーダーズ』には 'cockapoo' という語もあり、これは「コッカースパニエルとプードルの雑種」である。翻訳家の岸本佐知子さん(ニコルソン・ベイカーの翻訳で有名)は仕事で『リーダーズ』を引いているときに、この単語がやたら目につくのだそう(詳しくはエッセイ集「気になる部分」を読みたい)。関係ないがジャガイモとトマトを掛け合わせた「ポマト」という野菜があるらしい。友人某はこれを、別に「トテト」でもいいではないか、と言っていた。また、私が中学生だった頃、テレビで「右に回すとボールペン、左に回すとシャープペンシル、<シャーボ>と呼んで下さい」と宣伝されていた筆記具があった。その頃、それ以前からあった「一方に回すと黒ボールペン、

もう一方に回すと赤ボールペン」という筆記具は、私の友人の間では「ボーボ」と呼ばれていた。

・ **blype**: 「日焼けした後で剥け落ちる皮。」『プログレッシブ』にも『リーダーズ』にも載っていない。『Oxford English Dictionary』では語源不詳ということになっていて、用例として1878年に発表されたロバート・バーンス(1759~96。スコットランドの国民的詩人。日本では「螢の光」とか「麦畑」で知られている)の「ハロウィーン」という詩の一節が挙げられているだけだ。小学校時代の夏休みなどに、急激に陽に焼けてその炎症が治まった頃、試しに皮を剥がしてみたら巨大な blype が取れて、嬉しくなってしばらく保存しておいたりしたことがあるのはきっと私だけではないはずだ。

・ **lethologica**: 「ある単語がどうしても思い出せない症状。」これは『OED』にさえ載っていない。医学英語辞典を当たらないとだめなのかも知れない。外国語に限らず、母国語でもある特定の単語をどうしても思い出せないということはよくあるが、近い将来 'lethologica' という単語をどうしても思い出せなくなりそうな予感がする。

・ **transurphobia**: 「散髪恐怖症。」これも『OED』になかった。似たような意味で 'tonsurphobia' というのも見たことがあるが、こちらは「剃髪恐怖症」。散髪を恐れる理由というのが、刃物を持った他人に至近距離で自分の頭部をいじられることに対する恐怖なのか、変な髪型にされてしまうことに対する恐怖なのかは不明である。

・ **trilemma**: 「三つの立場の間での板挟み。」ここで 'dilemma' という単語を連想できれば話は簡単である。これは日本語で言う「ジレンマ」、つまり「二つの立場の間での板挟み」だ。語源はラテン語の 'di' (二重の) と 'lemma' (仮定) である。この 'di' が 'tri' になったのが 'trilemma' である。接頭辞 'tri' は「三」を表し、例えば「三角形」は 'triangle'、**「三輪車」**は 'tricycle'、**「三カ国語話者」**は 'trilingual'、**「三脚」**は 'tripod'。

・ **titlle**: 「小文字 'i' の点。」ちなみに私は今、小文字 'i' の横棒を英語で何と呼ぶか、どうしても

思い出せない。まさに lethologica である。

・ **vexillology**: 「旗に関する研究。」`vexillum` は古代ローマの「軍旗」であり、vexillology には『リーダーズ』では「旗学」という訳語を与えている。だが、「旗学部」や「旗学科」がある大学というのも見たことがないし、旗学者に会ったこともなければ、日本旗学会とか国際旗学会というのも聞いたことがない。

・ **queuetopia**: 「何をかうにも長蛇の列に並ばなければならない共産主義国。」ウィンストン・チャーチル (1874~1965。英国の政治家) の造語。これはもちろん `utopia` という語が基になっている。「ユートピア」はサー・トマス・モア (?1477~1535) の造語で、架空の理想国の名称。もっともモアの『ユートピア』(中公文庫) を読んで、その世界が「理想的」だとはあまり思えないのだが。ユートピアの語源はギリシア語で `ou` (ない) と `topos` (場所) に名詞語尾 `ia` がついて、「存在しない場所」の意味だが、音声的には同時に「よい (eu) 場所」の意味をも伝えている。いずれにせよ、理想的な国というのは存在しないのである。ちなみにサミュエル・バトラーの小説『エレホン』に描かれる理想国エレホン (Erehwon) もまた、`nowhere` を逆から綴ったものであり、ユートピアと同様「存在しない場所」ということである。一方で `queue` という単語は英国以外ではあまり使われていないようだ。英国では常識以前の日常基本語なのだが、これを知らなかった英語教師が日本に少なくとも三人いる。これは「キュー」と発音し、動詞で「並ぶ」、名詞で「列」である。

・ **ideolocator**: 「地図上の現在地を示す印。」日本ではこういう場合、たいてい赤い矢印か三角印で「現在地」と書かれているが、英語圏では `You are here` と書かれている場合が多い。

・ **penultimate**: 「最後から二番目の。」ちなみに最後から三番目は antipenultimate。ただし日常会話で「最後から二番目の ~」と言いたいときにはこのような面倒な単語を使う必要はなく、`the last ~ but one` と言えばよい。

・ **hemidemisemiquaver**: 「六十四分音符。」こんな

音符が頻出する曲をピアノで弾けと言われたら嫌だ。語幹となる `quaver` が「八分音符」であり、それを半分にした `semiquaver` が当然「十六分音符」である。ちなみに「一週間に一回」を英語で言うと `weekly` だが、その半分の頻度「二週間に一回」は `semiweekly`、「半円」は `semicircle`、「準決勝」は `semifinal` だ。それでその「十六分音符」をさらに半分にした「三十二分音符」を `demisemiquaver` と言う。この接頭辞 `demi` もまた `semi` と同様「半分の」を意味し、通常の半分くらいの大きさの珈琲カップが `demitasse` (デミタス)、「半回転」が `demivolt`、「半神」は `demigod` である。そして、`hemi` もまた「半分の」を意味する接頭辞であり、例えば「北半球」とか「南半球」とか言うときの「半球」は `hemisphere`、「半地中植物」は `hemicryptophyte`。

・ **groaking**: 「人が何かを食べているときに、少しくれないかなあと思ってじっと見つめること。」これと同じ意味の日本語の単語は (多分) ない。ないということは、このような行為が、日本においてよりも英語圏諸国においてより頻繁に行われているということであろう。あるいは日本でも同じくらい行われるにもかかわらず、されている側が気付かなかったり故意に黙殺したりして、あまり認知されないということなのかも知れない。

・ **taphephobia**: 「生き埋めになること、生きたまま埋葬されることに対する恐怖。」語尾の `phobia` は「恐怖症」を表し、例えば「高所恐怖症」は `acrophobia`、「閉所恐怖症」は `claustrophobia` である。他にも、

・ **telephonobhobia**: 「電話恐怖症。」などというのがある。

・ **hydrodaktulpsychicharmonica**: 「硝子製楽器の一種。」日本語で何と呼ぶかは不明。最後の9文字は「ハーモニカ」である。最初の `hydro` は「水」を意味する (`hydrogen` は「水素」、`dehydrate` は「脱水する」)。少しずつ大きさの異なるグラスを重ねて横向きにして、中心に軸棒を通して固定し、それを回転させ水で濡らしながら手で擦って音を出す楽器で、ベンジャミン・フランクリン (1706

～90。米国の政治家・著述家・発明家)の発明品だそう。

・**deltiologist**:「絵葉書蒐集家。」当然のことながら 'deltiology' は「絵葉書蒐集」を意味する。私は別に deltiologist ではないのだが、私の手許には夥しい数の絵葉書がある。観光地や美術館などでいつも多めに買ってしまいうので、知らないうちに集まってしまったのだ。

・**bromhidrosis**:「臭気を放つ汗。」語頭の 'brom' は「臭素」、それに続く 'hidro' は「水」である。ちなみに、人間の汗に臭気はない。皮膚の表面のバクテリアによって臭いが発生するのである。なお、日本語で「汗」と言うと、文脈によっては「青春のシンボル」的な爽やかなイメージになるが、英語の 'sweat' はあまり人前で発話しない方がいいようなイメージの単語であるということに留意しておく必要がある。私が知る限り「ポカリスエット」は英語圏諸国では発売されていない。

・**buccula**:「二重顎。」英国では全国民の6割以上が肥満であり(しかもこの割合は年々増加している)、当然二重顎の人も多い。だがこんなややこしい単語が使われることは滅多になく、通常は 'double chin' と言う。

・**archibutyrophobia**:「ピーナッツバターが硬口蓋(口の中の上の部分)に付着することに対する恐怖症。」語頭の 'arch' は「一番上の」の意味で、例えば天使の中で一番地位が高いのが 'archangel'、同様に主教で一番偉いのが 'archbishop' だ。そして 'butyro' が「バター」である。「ピーナッツ」はどこにもない。したがって 'archibutyrophobia' が何故「<ピーナッツバターが>硬口蓋に付着することに対する恐怖症」の意味になるのかは不明。ちなみに英国には、「バターじゃないなんて信じられない」(I Can't Believe It's Not Butter)という商標名のマーガリンがある。

・**gymnophobia**:「裸体恐怖症。」ギリシア語で 'gymno' は「裸体の」の意味。エリック・サティ(1866～1925)のピアノ曲「ジムノペディ」は「裸の子供」ということだ。古代ギリシアには「ジムノペディア」という祭があって、これはア

ポロンやパッカスを讃えて全裸で踊り狂う祭だそう。体育館、屋内競技場を意味する 'gymnasium' も原義は「裸で訓練をする公共の場所」という意味である。古代ギリシアでは運動競技はたいてい全裸で行われていたのである。というわけで gymnophobia だが、これは「裸体を見ることに対する病的な恐怖感」と定義されている。こういう症状を持つ人が、芸術作品や広告などにおける裸体描写に異を唱えて騒いだりするのだろうか。一方で、

・**dishabiliophobia**:「人前で衣服を脱ぐことに対する恐怖症。」というもある。今度は裸体を見ることではなく見られることに対する病的な恐怖である。もちろん、まともな文明人なら特定のシチュエーション(温泉の脱衣所とか)以外において人前で衣服を脱ぐことには多少なりとも抵抗があるだろうが、その抵抗感が尋常でなく、恐怖というレベルにまで行ってしまうのが dishabiliophobia なのである。語頭の 'dis' が「否定、分離、剥奪」を表すことは想像に難くないし(sportの語源は disport、つまり「離して」「運ぶ」ということであり、要するに「本来の状態(仕事場とか家庭とか)から離れたところへ自身を運ぶ」ということである)、'habilio'の部分は例えば 'habilitment'(古い用法で「服飾品、衣服」、現在は「備品、設備」という単語を連想すればよい)。

・**cheriphobia**:「笑い死にすることに対する恐怖症。」笑いすぎて死んだ人というのは真間にしてまだ知らないが、笑い過ぎて嘔吐した奴なら私の友人の中に少なくとも一人いる。幸い私はその現場にいなかったが。

・**carnophobia**:「肉恐怖症。」語頭の carno が「肉」に関係する。例えば carnival の原義は「肉を取り上げること」で、復活祭の前の40日間に肉食を絶つ前に心おきなく肉類を食す祭のことだ。また carnivorous といえは「肉食性の」という意味であり、一方で carnation は「人肉食」が元来の意味である。英国では復活祭の40日前の水曜日(Ash Wednesday という)の前日の火曜日(Shrove Tuesday、通称 Pancake Tuesday)に、巨大なパ

ンケーキに肉類を初めとする消費すべき食材をすべて投入して焼くという習慣があった。今でもバッキンガムシャー州のオルニーという町では、地元の主婦がフライパンにパンケーキを入れて空中に投げつけてはまたそのフライパンで受け止めつつ走って順位を競うという 'Pancake Race' が毎年この日に行われている。

・fey: 「死にかけている人が、何事もないかのように起き上がって談笑している状態。」これはジョーディ (Geordie)、つまりニューカースル・アポン・タインおよびその周辺 (イングランド北東部) の方言である。『リーダーズ』には「異常にはしゃいだ、高ぶった《昔死の前兆とされた》; 頭の変な、気がふれた; 第六感のある、千里眼の; この世のものでない、異様な; 魔力をもった、妖精のような; 《スコ》死ぬ運命の、死にかけている。」とある。ジョーディ用法には言及していない。最後の「死ぬ運命の」は現在ではスコットランド方言だが、ルネサンス時代のイングランドを代表する詩人のひとりエドモンド・スペンサー (?1552~99) はこの語をこの意味でたびたび用いている。それにしても、ニューカースルあたりでは死にかけている人が起き上がって談笑するということがよくあるのだろうか。それが気になったので、ニューカースル大学に留学していた友人に頼んで、彼の地に生まれ育った人にこのことについて訊いてもらった。すると、そのニューカースルの人は、'fey' という単語を「死ぬ運命の」と「狂ったように興奮して」という意味でのみ知っていた、とのことである。私がある本で見つけた「死にかけている人が、何事もないかのように起き上がって談笑している状態」という情報が間違っているのか、あるいはジョーディといってもある程度広い範囲の方言なので (タイン川流域全体を含む)、ニューカースル境界以外の地域での用法なのか、今後調査を続行したいと思う。

電子辞書の使い方

経営学部

田川 光照

最近、電子辞書が急速に普及し、教室でも電子辞書を使っている学生の姿が多くみられるようになった。電子辞書には、もちろん長所もあるが短所もある。以下に、電子辞書を使うにあたって注意すべきことなどを述べておきたい。フランス語と韓国語を中心に述べるが、他の言語にも共通する点が多いので、これら以外の言語を履修している人もぜひ読んでいただきたい。

1. 電子辞書の長所

まず、電子辞書一般がもつ長所と短所についてまとめておこう。

長所としてまず第一にあげることができるのは、そのコンパクトさと携帯性である。とりわけ、複数の辞書を持ち歩かなければならない場合、電子辞書ひとつですむので非常に重宝する。筆者の場合、バスや電車の中で調べるために、また海外に出かける時のために電子辞書を持っている。

第二に、収録されている辞書間でのジャンプ機能はありがたい。とくに、たとえば和仏辞典や日韓辞典で調べたフランス語や韓国語の単語、表現などを仏和辞典や韓日辞典で確認する (日本語を外国語に訳すような場合にはこの作業を必ずしなければいけない) 時などに威力を発揮する。あるいは、仏和辞典や韓日辞典で調べた単語の日本語の意味が分からない時に、その意味を調べるのに国語辞典にジャンプするという使い方もありうる。

第三に、最近の電子辞書には音声データが入っているものも多く、単語や例文の発音を確認する